

2024年度 早稲田大学大学院教育学研究科
博士後期課程 専門職業人入学試験問題 [小論文]
【教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）】

解答上の注意

1. 解答用紙の所定欄に、研究指導名・指導教員名・受験番号・氏名を必ず記入すること。
2. 解答の際には、問題番号、設問番号を記入してから解答すること。（例「問題1 問1」）
3. 解答用紙が複数枚配付された場合、ホッチキスははずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。
4. 問題用紙は「3枚」（本ページ含む）、解答用紙は「1枚」です。必ず枚数を確認すること。

以 上

博士後期課程 入学試験問題

専門職業人入試

科目名 小論文

(国語科教育学・国語科内容学)

一 小論文

次に示す文章は、丸川哲史『帝国の亡霊』の一節である。文章を読み、後の問いに答えなさい。

夏目漱石を引用するまでもなく、日本の近代は、欧米をモデル化し模倣するその外発性において、またその模倣の限らない成功においてその命脈を持ち続けて来た。例えば竹内好は、そういった成功そのものを日本の近代の「失敗」として捉える、一つの逆説を提示していた。言い換えれば、模倣の成功が自分たちの「進歩」と錯覚されて来た事実を指摘したわけである。竹内によれば、欧米にとっては「進歩」とは自分たちの「進歩」であり、自分が自分であり続ける運動であるのに対して、非欧米地域における「進歩」はむしろ自己の喪失として経験されるという。その意味で今日の不安や危機というものも、今更のものではなく、むしろ先験的なものであり、今日それがあられもなく漂い始めただけなのかもしれない。だから日本文学の危機は、出版産業における「文学」の不振といった狭義の意味を越えて、より大きな日本の「近代」にかかわる一つのシグナルとしても考えられよう。

文学が日本の近代の型としての「進歩」の観念を支えて来た装置であったならば、その文学の危機は、実はその「進歩」の不可能性をこそ物語っているかもしれない。しかしそれは、歴史の終焉を単純に意味するのではない。むしろ逆である。「進歩」の錯覚から目覚めさせられた時、むしろ私たちは何かを回復するのかもしれない(決して元のままには戻れないにしても、また途轍もなく苦痛であったにせよ)。

ベンヤミンは、エッセイ「歴史の概念について」の中で、習慣化した思考を停止するもう一つの思考を準備していた。それはまさに「進歩」という錯覚からの「目覚め」を言い表す。ベンヤミンは、そのような覚めた人間を「歴史的唯物論者」と名付けていた。

思考するということには、さまざまな思考の運動のみならず、同じようにその停止も含まれる。思考がもろもろの緊張に飽和した状況配置において突然停止すると、そのとき、停止した思考がこの状況に一つのショックを与え、そのショックによって思考はモナドとして結晶化する。歴史の対象がモナドとなって歴史的唯物論者に向かいあうとき、もっぱらそのときにのみ、彼は歴史の対象に近づく。この構造のなかに彼は出来事のメシア的停止のしるしを、言いかえれば、抑圧された過去を解放しようとする戦いにおける革命的なチャンスのしるしを認識するのだ。彼はこのチャンスを認めるや、歴史の均質な経過を打ち砕いて、そのなからひとつの特定の時代を取り出す。同じようにして、彼はこの時代から一つの特定の生を、そしてこの生のなしたすべての仕事(=作品)からひとつの特定の仕事(作品)を取り出す。彼のこの方法の成果は、次の点にある。すなわち、ひとつの仕事(作品)のなかにひとつの生のなした全仕事(全作品)が、この全仕事(全作品)のなかにその時代が、その時代のなかに歴史経過の全体が、保存されており、かつ止揚されているのである。歴史的に把握されたものという滋養ある果実は、その内部に、貴重な味わいのある、がしかし趣味的な味とは無縁の種子として、時間を含んでいる。

このようなベンヤミンのコンセプトは、まさに竹内好が「歴史は、空虚な時間の形式ではない」と述べていた近代主義批判とも平仄を合わせている。さらに竹内は、「自己を自己たらしめる、そのためその困難と戦う、無限の瞬間がなければ、自己は失われ、歴史も失われる」とも述べていた。ヨーロッパ(欧米)の「進歩」の危機へとその思想的標準を定めていたベンヤミンと、ヨーロッパ(欧米)の圧迫への「抵抗」をアジア(非欧米)における思想課題に据えた竹内好が、奇しくも一つの思想営為において出会っているとも言えようか。

いずれにせよベンヤミンが述べるように、文学作品が時代や時間を結晶化したモナドであるとするなら、もちろん日本及びアジア(非欧米)の文学の作品も、その例外ではない。先述したように、言文一致革命以降の日本文学は、広義の意味で「進歩」の器としての性格を帯びるものではあった。しかし当然のことそれと同時に、そこには様々な抵抗や失敗の徴も刻まれていた。日本文学の伝統として、「立身出世」への拒否、あるいはそこから脱落したエネルギーが滞留する磁場としても、文学は機能した。ただし、それが総体的な日本的近代の失敗の認識、あるいは激しい抵抗にまで達していたかという基準では、早急な結論は出せない。日本文学はやはり、一般の型としては「現実逃避」の手段として機能していたと同時に、しかもそれは結局のところ「進歩」を補完する役割を越えなかったと言えよう。

問 傍線部「そこには様々な抵抗や失敗の徴も刻まれていた」とあるが、「言文一致革命以降の日本文学」の中で「進歩」に対する「抵抗や失敗の徴」が書き込まれた作品の具体例を挙げ、なぜそう言えるのか、その理由を述べなさい(複数の作家や作品に言及してもよい)。

博士後期課程 入学試験問題

専門職業人入試

科目名 小論文

(国語科教育学・国語科内容学)

資料解説

次に示すのは、水上瀧太郎の小説「山の手の子」(『三田文学』一九一一年七月号)の一節である。文章を読み、問いに答えなさい。

それは確に早春の事であつた。日毎に一人で訪づれる崖には一夜の中に著しく延びて緑を増す雑草の中に見る限りいたいた草の花が咲いて居た。その草の中にスクスクと抜出た虎杖を取る為に眼下に打続く裏長屋の子供等が、嶮しい崖の草の中をさがさがあさつて居た。小汚ない服装をした鼻垂しではあつたが犬のやうに軽快な身のこなしで、群を作つて放肆に遊び廻つて居るのが遊相手の無い私には何んなに懐しくも羨しく思はれたらう。足の下を覗くやうに崖端へ出て、自分が一人ぼつちで立つて居る事を子供等に知つて貰ひ度いと思つたが此方から声を掛ける程の勇氣もなかつた。全く違つた国を見るやうに一挙一動の掛放れた彼等と、自分も同じやうに振舞ひ度いと思つて手の届く所に生へて居る虎杖を力充分にやつと抜いて、子供たちのするやうに青い柔い茎を噛んでも見た。しくしくと冷め度い酸い草の汁が虫歯の虚孔に沁み入つた。

斯うした果敢ない子供心の遺瀧なさを感じながら日毎同じ場所に立つ御屋敷の子の白いエプロンを掛けた小さい姿を、やがて長屋の子らが崖下から認めた迄には、如何にかして、自分の存在を彼等に知らせやうとする瓦を積んでは崩すやうな取り止めも無い謀略が幼い胸中に幾度か徒事に廻らされたのであつたが遂々何の手段をも自分からする事なく或日崖下の子の一人が私を見付けてくれたが偶然上を見た子が意外な場所に佇む私を見るとさも吃驚したやうな顔をして仲間の者にひそひそと私語く氣配だつた。かき草の中を潜つて居た子供の顔は人馴ぬ獣のやうに疑深い眼付で一樣に私を仰ぎ見た。

其の翌日。もう長屋の子と友達になつたやうな氣がして、いつもよりも勇んで私は崖に立つて待つて居た。やがてが、やがや列を作つてやつて来た子供達も私の姿を見て怪しまなかつた。

『坊ちゃん、お遊びな。』

と軽く節を付けて昨日私を見付けた子が馴々しく呼んだ。私は何と答へていゝのか解らなかつた。『町つ子と遊んではいけません。』と云つた乳母の言葉を想起して何か大きな悪い事をしてしまつたやうに心を痛めた。それでも、

『坊ちゃんお出でよ。』

と気軽に呼ぶ子供に誘はれて、つい一言二言は口返へしをするやうになつたが悪戯子も、流石に高い崖を攀登つて来る事は出来ないので大きな声で呼び交すより詮方が無かつた。

此様な日が続いた或日、崖上の私を初めて発見した魚屋の金ちゃんは表門から町へ出て来いと云ふ智恵を私に与へた。暫時は不安心に思ひ迷つたが遊び度い一心から産婆や看護婦にまじつて乳母も女中達も産所に足を運んで居る最中を私の小さな姿は黒門を忍び出たのである。曾て一度も人手を離れて家の外を歩いた事の無かつた私は、烈しい車馬の往来が危つかしくて、折角出た門の柱に噛り付いて不可思議な世間の活動を臆病な眼で見て居るのであつた。

麗な春の屋は、勢よく坂を馳下つて行く俥の輪があげる軽塵にも知られた。目まぐるしい坂下の町を暫眺めて居ると天から地から満ち溢れた日光の中を影法師のやうな一隊が横町から現はれて坂を上つて来た。

『坊ちゃんお遊びな。』

と遠くから声を揃へて迎へて来た町つ子を近々と見た時私は思はず門内に馳込んで了つた。汚らしい着物の、埃まみれの顔の、眼ばかり光る鼻垂しは手々に棒切を持つて居た。

『坊ちゃん、お出でな皆で遊ぶからよ。』

中では一番年増の金ちゃんは尻切草履を引ずつて門柱に手を掛けながら扉の陰にかくれて恐々覗いて居る私を誘つた。坊ちゃんの小さい姿は町つ子の群に取巻かれて坂を下つた。

間もなく私は兄になつた。其の当座の混雑は、私をして自由に町つ子となる機会を与へた。或は邪魔者の居ない方がかゝる折には結句いゝと思つて家の者は知つても黙つて居たのかも知れない。

比較的に氣の弱いお屋敷の子は荒々しい町つ子に混つて負を取らないで遊ぶ事は出来なかつたが彼らは物珍しがつて私をばちやばちやる。私は又何をしても敵ひそうもない喧嘩早い子供達を恐いとは思ひつゝも窮屈な陰気な家に居るよりも誰に咎められる事も無く氣ままに土の上を馳廻るのが面白くて、遊びに疲れた別れ際に『明日もきつとお出で』と云はれるまゝに日毎に其の群に加つた。

問一 この場面からは、「私」と「町つ子」のどんな関係が読み取れるか、説明しなさい。

問二 この場面の語りや表現にはどのような特徴が指摘できるか。小説本文を根拠にしながら、あなたの考えを述べなさい。

研究指導	
教員名 ()	
受験番号	
氏 名	

受験番号	
氏 名	

氏 名	
-----	--

氏 名	
-----	--

博士後期課程 入学試験解答用紙 専門職業人入試
科目名 小論文（国語科教育学・国語科内容学）

博士後期課程 入学試験解答用紙 専門職業人入試

科目名 小論文（国語科教育学・国語科内容学）

大学記入欄

問題番号

裏面に続く

